

---

# この広い海の上で

神崎亜美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この広い海の上で

### 【Nコード】

N5011V

### 【作者名】

神崎亜美

### 【あらすじ】

悪友と子分で海賊パロです。最後に眉毛を出そうとしてやっぱ止めた。雰囲気で読みましょう。深く突っ込んだら負けです。

(前書き)

隻眼の船長アントーニヨ率いる海賊船。彼は右目を奪った因縁の相手、アーサーを強く憎んでいた。

だからあの時、彼の船を見つけたアントーニヨ達は攻撃を仕掛けた。遠くの空が暗雲に覆われようとしていたのに気付かなかった。

相手の船上で彼を追い詰めたと思ったとき、それは起こった。

雨に濡れ不明瞭で左半分だけの視界にもはつきりと、波が彼を呑み込もうと迫っていた。

避ける間も与えられなかった彼が最後に見たのは、口元を歪めた凶悪な笑みだった。

嵐の収まった船。船長室の椅子にゆるりと腰掛けたアントーニヨは、机の向かいに立つロヴィーノに顔を向けた。アントーニヨは手を顔の前にかざして、自嘲的に笑う。

「あーあ……目え、どっちも見えんくなってもうた……」

彼は何も答えない。ただ、嗚咽の一つも漏らすまいと歯を食いしばっているだけだ。

「つたく……これもぜーんぶあのクソ眉毛のせいやわ。次会ったら今度こそボツコボコにしたるで、ほんま」

言いながら乾いた笑いを止めないアントーニヨ。人一倍敏感になった彼の聴覚は、こちらに大腿で近づく足音を感じ取った。顔をその方向に向ける前に、体を暖かい何かが包みこんだ。

「……………ロヴ？」

背中に回された腕。

彼のおい。

押し殺したような呼吸。

微かに震える体。

「お前、泣いとるん？」

「泣いてるわけっ……ねえだろ!!」

声が震えている。慰めてやろうと彼の背に腕を回そうとした。が、ロヴィーノの次の一言に、アントーニヨは腕を止めざるを得なかった。

「お前が泣いてねえのにつ……俺が泣けるわけなんだよ!!ばかやろ……!!」

「っ……………」

「いつもいつも、うつせえくらい感情出すくせに……こんな時に限つてなんでそう静かなんだよ!!お前らしくねんだよ!何笑つてんだよ!俺たちはお前につ……そんな顔させたくて命懸けてねえんだよ

「!!」

「ロヴ……」

ロヴィーノの腕が更に力を増してアントーニヨを包む。彼はゆっくりと、口を開いた。

「ロヴ、俺な、カークランドの船でアイツとやり合つてな。俺本気でアイツの片眼抉つたるつて思つてな、けど………またあかんかった。ほんまに悔しゆうて、周りが見えとらんかった。カークランドもそれに気い付いてん。俺を攻撃避ける振りして大波の真ん前に誘い出したんはアイツの小賢しい計算や。波にのまれて、死ぬ思いで海面まで上がったときには、もう視えてへんかった。……ロヴ」

「何だよ」

「俺、別に悲しくない訳ちゃうん。怒つとらんわけでもないん。けどな」

「……」

「何を悲しんだらええん？何に腹立てたらええん？俺には分からんそれ考えたら、急に笑えてきてん……せやのに今は、何でやるな……自分が馬鹿みたいに弱くてちっさいモンやと思えてきて、何やもう、不甲斐のうてっ……うっ、堪忍なっ……こない船長で……ほんまに、堪忍な……」

そのあと、アントーニヨはロヴィーノの腕の中で、声を上げて泣きじゃくつた。その音にまじって、ロヴィーノのすすり泣きが聞こえた。

「なあ、フラン」

「なあに？ギル」

「これからどうなんだろうな。この船」

「それはトニーが、船長が決めることだよ。お兄さん達にあれこれ言う権利はない」

「だな……」

「ギルちゃん、もしかして、弱気？」

「……んなわけねえよ」

「ふーん」

「お前はどうなんだよ」

「……ちよつと怖い、かな」

「だつせえの……」

「お互い様」

「俺は今、すつげー前向きだぜ？」

「へえ？」

「トニーには俺もお前も、フェリちゃんのお兄さまもいる。大丈夫だ。アイツが船を下りることはねえさ。もしそんな寝言いやがったら、俺たちが目え覚ましてやるっぜ」

「……………」

フランスは黙ってギルベルトを見つめていたが、やがて微笑んで答えた。

「ああ」

ロヴィーノに呼ばれ、船長室に戻ると、アントーニヨが真剣な目つきで地図を睨んでいた。

「見えてねえんだろ？何してんだよ」

「んー？ギルちゃんか？ちよつと勘戻そ思てな」

「勘？」

「何かそないなモンあるんちゃうかって。ロヴ、テストしたって」

「おう」

ロヴィーノの隣で地図を指さすアントーニヨ。

「ここがシチリア。でレスボス。あと、これがトルトゥーガ。合うとる？」

「合格」

その答えに彼は少し誇らしげに笑った。

「当たり前やん。何年ココ座つとる思っん？」

「じゃ、気を取り直して……」

「ん。フラン、ギルちゃん。ちょおこつち来て」

手招きをして、アントーニヨは足を組んだ。彼がこうするのは作戦や重要な発表があるときだ。

「俺は、この船の実質的指揮権をしばらくロヴィーノに預けようと思っ」

その言葉にフランシスは

「異議なし」

と即座に答え、ギルベルトも

「同じく」

と言った。アントーニヨは帽子を取って、ロヴィーノの頭にかぶせる。光を失って尚鮮やかな緑眼が、懸命に目の前を見ようとしていた。

「ええか？ロヴ。ちゃんと返してな」

「了解、船長」

新たな船出を祝福するかのように、波が穏やかに揺れた。

(後書き)

あの船はどうなった？

そうか、まだ浮かんでるか。

いや、残念じゃねえ。

遊び相手がいなくなるのは退屈だ。

奴が生きていようがいまいが関係ない。

連中は奴の意志を継いで再び俺を狙う。

それでいい。

奴は死んでも海に縛られる男だ。

生き長らえた所で船を下りはしない。

自分の執念が愛する船員達が引き継ぎ、破滅していく。

お前は黙ってみているがいい。

その時もし会えたら、また殺してやる。

亡霊であろうとな。

お前が自己を保てなくなるまで、何度でも、何度でも。

だから

またな？アントーニヨ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5011v/>

---

この広い海の上で

2011年10月8日12時20分発行